

定植時の苗の大きさの違いが「とちあいか」の収量、品質に及ぼす影響

要約

定植時のクラウン径 12mm 程度の大苗は、可販果収量 965g/株となり、クラウン径 10mm 程度の中苗の 121%であった。また、大苗において1～3月で先つまり果、先白果の発生が多くなった。

○ 展示のねらい

先つまり果の対策として減肥以外の方法を検討する必要がある。そこで、定植時の苗の大きさが収量、品質に及ぼす影響を検討し、今後の普及及び栽培技術確立の資とする。

○ 主な成果

- ・可販果収量は、大苗(クラウン径12mm)で965g/株、中苗(同10mm)で797g/株、小苗(同8mm)で711g/株で、大苗で最も多収となった(図1)。また、大苗になるほど芽数が増える傾向だった(図3)。
- ・B品重量割合は、1～3月に発生した先つまり果、先白果により大苗で多かった(図2)。

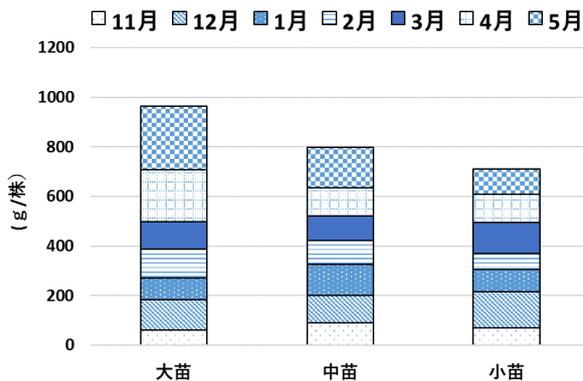


図1 可販果収量

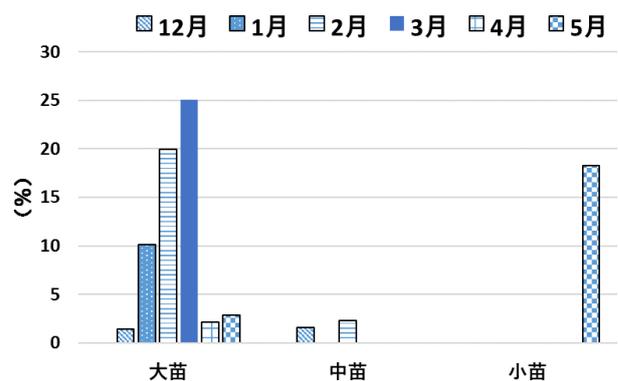


図2 B品重量割合

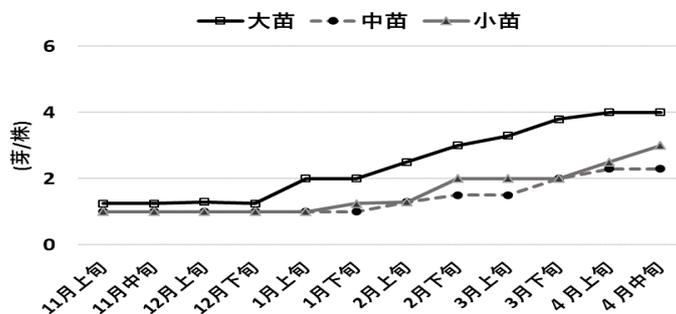


図3 芽数の推移

○ 今後の方向性

収量・品質の向上を図るため、厳寒期の適正な温度管理および芽数管理について検討する。

実施機関：下都賀農業振興事務所経営普及部 実施場所：栃木市
問合せ先：栃木県農政部経営技術課技術指導班 TEL 028-623-2322 FAX 028-623-2315